

論理に由って存在を捉えるに当り中心的位置を占めるものが判断(言葉に表現せられた命題)である。存在は判断に於て述語せられることに由り認識せられるのである。述語の最も一般的なるものが即ち範疇である。アリストテレスは範疇に十個を挙げた。其中実体以外は凡て実体を予想しこれに附帯的にのみ存する例えば性質は何物かの性質であり、場所は何物かが在る場所であるから、性質とか場所とかいう範疇は何物かに相当する実体の範疇を予想する。斯かる意味に於て範疇の中、実体は特殊の位置を占め主要の意義を有する。アリストテレスは「主語となつて述語とならぬもの」として実体を定義した。ところで種とか類とかいうものは主語となると共に述語となるから第一次的実体ではない。唯第一次的実体を予想して第二次的に実体と認められるに過ぎない。真に第一次的に実体たるものは個体でなければならぬ。斯くして一方論理の立場から述語としての普遍を重んじながら、他方存在論の要求上主語の表わす個体としての実体を述語の属すべき基体とする。而して範疇は論理が存在の原理なる以上、同時にそれは実体の存在様式であり同時に



古事記

天地の初発のとき

— 実在 — (六)

反省的方法

— 存在論、アリストテレス(二)

竹葉 秀雄

第 52 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所:愛媛県西条市
 上市甲 720-1
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

論理の一般的述語なのである。アリストテレスの論理は存在論に制約せられる実体の論理であり主語の論理である。それでは実体は如何なるものか。

付言 私達同志は東洋哲学とともに西洋哲学を学び、それを正・反とし、合なる日本哲学を解明せねばならぬ。そこに神道がある。「無の哲学から光の哲学へ」。故にアリストテレス形而上学は彼以後の西洋哲学の殆ど全体に対する源泉といふべきものであり、其基本的なる概念や思想は哲学の常識に属するものである。その所々に私の神道観を覗かせているが、私がこれを西洋哲学的に構成完成するには年齢と時間が許さない。後者を俟って大成していただくより無い。その時の暗示としていっているのである。

農士道

第五章 農士論

第二節 帰農的安立

農民の引導

一体従来農業の事を奨励するに、余りに人々のご機嫌を取り過ぎて農業の長所のみを示して短所を見せまいとして来た。曰く農業していても巧みにさえすれば金も取れる。熱心にさえすれば名誉も得られる。何某氏は藍綬褒賞も得たではないか。かくて名利の好餌を以て農村人の心を釣るが故に、実際に当たって見て其の名利の酬いられざるや、俄然として彼らは農に反旗を翻し来るのである。是れ亦、止むを得ざる事ではないか。何故に初めより「農業とは其の本質として金銭的利益の最も少い仕事である。世間の名聞の最も揚らざる仕事であつて、うんと働かねばならぬ仕事である。だから農業に従う以上は初めより其の覚悟でかからなければならぬ」と誠めてやらぬのか。此の農道的第一関を突破し得た者のみが、始めて農道的法樂境に遊び得るのである。農道的功德天に訪れられるのである。

農業の功德天

然らば何をか農道的功德天というか。私は少くも次の二大特性は農道生活に恵まれたる功德であると信ずる。其の一は農道生活の永安性であり、其の二は農道生活の自慊性である。

永安性とは、農道生活は一時の華々しさこそ無いが、精神的に於ても経済的に於ても永久的安定性を有する事である。この事に関しての冗説は一切省略する。唯同じ百円の金に就いて考えて見ても、農村の農道生活者に於ける百円の金と都市生活者に於ける百円の金と、何れが永安性あるかを比較して見るがよい。これは単に経済的のこのみではない。更に道徳上に於て健康上に於て深思すれば深思する程然るものがある。東京の大通りの商店は、或は経済上より、或は健康上より同一経営主の家が三十年と続かぬとさえ言うではないか。此の点農道生活者の大いに矜持すべき点である。

次に自慊性に就いて一言しよう。自慊とは自ら慊る―自ら満足するの謂である。

菅原 兵治

他の判定に依らずして自己自身の判定によりて満足するの謂である。農民は無位である。無官である。無位無官の布衣ということは一見すれば何等の官位も有せざる最下級の人間ということになるが決してそうではない。深く考察すれば人間として何等の拘束も受けざる最も自由なる存在である。知事や大臣はなるほど身分は上であるかも知れぬ。然し知事の子が親の職を継ぎたいからといって必ずしも然らぬ得るものでもなく、又、本人自身に於ても、辞令一本で転任もしなければならず、辞めもしなければならぬのである。然るに農民には転任も無ければ免職もない。又、日常の生活に格別の指揮や監督もない。天地大自然の間に、小なりと雖も一家経営の主人として、「日出でて耕し、日入りて息う。田を耕して食い、井を鑿りて飲む」悠々自慊の生活に浸り得るのである。俸給こそ取らぬであらう。官位勲等こそないであらう。然し天上天下唯我独尊底の無官の帝王、白衣の宰相たるの生活をなし得るのである。大学に「其の意を誠にすとは自ら欺くことなきなり。好色を好むが如く、悪臭を憎むが如し。此れを是れ自慊と云う」と説いているが、実に此の意味に於て「自ら慊る」の生活を樂しみ得るのである。農生活者には官位、勲等、俸禄等の人爵はないが、其の代り、これ無きが故に、其等の為に拘束せらるる何等の束縛も窮屈もない自由自慊の別天地があるのである。「自ら反みて縮くんば千万人と雖も吾往かん。自ら反みて縮からずんば、褐寛博と雖も怕れざらんや」と季子もいっているが、天下の人悉く之を罵るも自ら勤むる者の田は稔り、天下の人悉く之を褒むるも自ら勤めざる者の田は稔らない。ここに農民の尊い「天爵」がある。

散る時は浮かぶ時なり 蓮の花

労働量の大なること。名利的報酬の少いこと。——この二つの散るべきものを散らす故に、又洋々たる大海に尊い生活の永安と自慊という功德の花が浮かぶのである。かかる心で二宮翁夜話中の次の一節を読んで見れば、また一人の感激を覚えることである。

第四回自治集団会合

三浦 夏南

今回の会合で、自治集団の今後の具体的な方針がある程度はつきりしました。一つは自治の為に必要なあらゆる要素を部会ごとに分けて、これからの話し合いは部会ごとで行うことになりました。もう一つは、部会で話し合ったことをそれぞれの部会の代表者が集まって、話し合う総会を数か月に一度開催し、全体の方針とのズレがないかを確認することになりました。これまで農を中心に話が進められていましたが、現場にいる人とそれ以外の人で、温度差があり、なかなか議論が進まない状況にあったので、それぞれの得意分野に分かれて話し合うことは良いことだと思えます。

我々は農業部門と教育部門に入ることになりました。農業部門では、如何にして衣食住の完全自給を目指して行くのか、若い就農者をどのように増やして行くのか、資金面はどうするか等、問題が山積みですが、出来ることから一つ一つ話し合い、解決していくしかありません。教育部門では、一般の人達への宣伝、啓発よりも、まずは自治集団内での「自治」の理解を高めて行かなければならないということになりました。これまでの会議の中でも、漠然と自治的な生き方が良いという、ぼんやりとしたイメージを皆が共有している状態で、明確に「自治」とは何なのかということ認識している団体は多くないように感じました。これから具体的な行動を起こして行く上で、形ばかりが先行して、中身が伴わなければ、形が出来れば出来るほど、軋轢が生まれ、最終的には瓦解することにも繋がりがかねません。我が国の歴史、国体に基ついた自治という人類の生き方が、どのようにして個人主義、資本主義、民主主義といった、日本人に染みついてしまった西洋的生き方を超克していくのか、このところを明確に理解して行動して行かなければなりません。教育部門のメンバーと話し合いながら、如何にして皆で「自治」という思想を共有していくかを考えて行きたいと思えます。

次回の農業部門の話し合いは八月十日に荒谷さんのむすびの里で開かれます。九月には我々の愛媛に皆があつまることになりそうです。教育部門はとりあえず八月にオンラインで話し合うことになりました。全体の集まりは十月に東京にな

る予定です。

全国組織で頻繁に集まる事が出来ないのので、歩みはゆったりと進んでいますが、少しずつ前には進んでいます。我々は自給自足に向けて出来ることを一つでも愛媛の地で積み上げて行きたいと思えます。

とよくも農園だより

三浦 美恵

昨年と比べて過ごしやすいとはいえ、朝七時を過ぎると額と背中にじんわりと汗がにじみ、本格的な夏を感じます。



今月も、自給自足に向けて一歩前進出来ました。まず大豆・小豆の定植です。管理機で畝をたて、マルチを手張りし、穴の開いた箇所にとつと三粒ずつ播いていきます。子供達も一生懸命自分の持っているバケツから穴に入れていきます。定番のフクユタカ、納豆用の大豆、大納言小豆など、畝ごとに品種を分けて育てています。最後に鳥に食べられないよう、しっかりと土を被せていきました。数日後、次々に芽が出ていた時は子供達と一緒に大喜び。大切に育てて、「収穫したら、味噌や豆乳、豆腐やきな粉を作ろうね」と話しています。

本格的な秋野菜準備までの間、方々の自給自足の達人に会う機会を多く設けています。先日は内子町にある菜月自然農園を訪れました。園主の和田さんの農作業のお手伝いをしながら、無農薬栽培の草管理、各調味料の作り方、鶏の育て方、種取り法、ハチミツの採り方、貯蔵庫の作り方等を教えていただきました。すぐに始められそうな事から、実現までには時間のかかりそうな事、また和田さん自身もまだ取り組めない課題を教えていただき、今後の自給自足への

イメージが湧きました。
また、地元でサトウキビを栽培されている坂井さんにもお話を聞きに行きました。立派に育つサトウキビを見てその大きさと逞しさに圧倒されました。ほのかに

甘い、成長途中のサトウキビジュースを頂き、黒糖に加工する過程まで懇切丁寧に教えていただきました。早速来春からはサトウキビを植えて、自給自足の黒糖にする計画を立てています。

六月頭に植えたお米は随分と育ち、早生品種からは早くも穂が出てきています。子供達と時間を見つけては様子を見に行っているため、愛着がわき、ぐんぐん育っていく様子は愛おしくなりません。水の管理は手間がかかりますが、喜びは大きく、収穫がとても楽しみです。

子供達も、今月は初めて二人だけで定植機「なかよくくん」を使ったネギの定植ができました。大豆・小豆の六分の一は子供達が播きました。十日に一度のアスパラガスへの追肥では、回を重ねるごとに二人の播ける肥料の量が増えてきています。今は微力ではありますが、暑い時間にも毎日外でお手伝いする子供たちは、確実に体力・集中力がついてきており、三浦家の戦力になる日も近いと感じています。今まで通り、ネギの定植・収穫や、朝夕のアスパラガス収穫、里芋の栽培をしながら、一日また一日と、自給自足に向けて研究・準備・実践が進んでいることは悦ばしく、今まで以上に農業への気合が入ります。来月も懸命に田畑を耕し、時間を見つけて研究・調査に励み、一日でも早く自給自足が実現できるよう努めていこうと思います。



★お詫び

去る七月十七日、松山市にて総会を開催する予定でありましたが、コロナ情勢により、急遽延期することとなりました。ご参加いただくはずであった皆様方には大変ご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。改めて会場を変更し、総会の場を設けさせて頂きますので、別紙ご案内をご確認ください。よろしくお願いたします。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円